

## 文化としての母性

——『或る「小倉日記」伝』小論——

濱 森太郎

**要旨** 昭和二十八年一月、松本清張は第二十八回の芥川賞を受賞した。受賞作は『或る「小倉日記」伝』。明治の文豪森鷗外の小倉時代の生活を復元する事に賭けた、美貌の母「ふじ」と不具の息子「田上耕作」との鮮烈な生活を描いた物語である。選考委員会の席では、文章練達なるも、内容の上で今一步の進境を要すると見る意見が多数を占めた。推奨する選者は、この作品を母と子との愛情物語と読んだ。否定した選者は、この作品を、「無名の文学青年の伝記」として読んだ。母と子の愛情を深く見るか深く見るかで、選者たちの「読み」と「評価」とが分かれていた。

私達の文化の中では、「夫」も「妻」も、「子」を育てる事で一人前に成熟する。したがって、もし不満足な子供しか持つことが出来ないとするれば、それだけで人間としての威信が傷付けられる。そして、それにも拘わらず「一人前」に生きていこうとするなら、「父」も「母」も人並み以上の人間的な強さを求められる。その時、人は、否応なく個性的に生き始める。『或る「小倉日記」伝』の中では、「父」の定一は、耕作の体を苦しめて死んだ。「母」ふじは、最後まで「母」でありつづけた。子供の最後を看取る事で、彼女は「母」をまっとうした。

戦後文学に登場する「母」のイメージは、一般には、確かに江藤淳の言うとおり「成熟と喪失」の過程を経て「崩壊」（江藤淳、「成熟と

喪失—母の崩壊—」しつつある。この時の流れに照らせば、『或る「小倉日記」伝』の中の「母」は、明らかに一時代前の「母」だと言ってもよい。しかも、その古い「母」の中に新たに何を発見したわけでもない。この作品の評価は、当然別れるだろう。そして、読者の大部分は、多分この作品に安らぎを感じるだろう。彼等が求める「母性」は、かつて『鶴女房』『蛙女房』『蛇女房』『孤女房』などメルヘンの中に度々登場した、昔懐かしい無限包容の母性だからである。

### 一 はじめに

かつて、あらゆる家庭で、子供の誕生は不安に取り巻かれていた。出産時のトラブル。トラブルによる感覚や知能の損傷。疫病や事故。そして、死。父母の遺伝的な形質のみならず、日常のちよつとした所業までが新生児の形質に反映するという迷信の数々。お蔭で、健全な子供が生まれることは、幸運である以上に善良な父母であることの証明であった。殊に、母親においては、では、もし、不具の子供が生まれたら。

松本清張の芥川賞受賞作『或る「小倉日記」伝』は、不具の青年と美貌の母との貧しい生涯を描いた物語である。青年の名は、田上耕作。

母の名は、「ふじ」。ふじの父は、白井正道。父が熊本藩の家老の家柄に生まれた政治家だったため、ふじの縁談は、降るようであった。だが、結局は、甥の田上定一に嫁いだ。長男耕作を儲けたのは、明治四十二年十一月二日。耕作は、口をだらりとあけたままよだれを垂らし、片方の足を引きずって歩いた。耕作が十歳の時、父定一が病死した。定一は、死ぬまで耕作の不具を苦にしていた(第二章)。

定一が病死したとき、ふじは三十歳。「やうやく中年に達して、美貌は一種の高雅さえ添えた。再縁の話は、諸方から持ち込まれた。しかし、再婚すれば、耕作が婚家先でどんな扱いを受けるかは知れていた。ふじは、生涯耕作から離れまいとして、再婚の意を絶った。生計は、五六軒ある家作の家賃で立てていける筈だった(第三章)。物語はここから始まる。そして、明らかにされるのは、この耕作から離れない事言い替えれば、母である事の意味である。説明の都合で、多少の時間をさかのぼっておこう。

## 二 芥川賞選考会議

第二十八回の芥川賞選考会議は、昭和二十八年一月二十二日、東京築地の料亭「新気楽」で開かれた。当日参会した委員は、丹羽文雄・舟橋聖一・石川達三・瀧井孝作・佐藤春夫・川端康成・宇野浩二・坂口安吾の八名。候補作品は、近藤啓太郎の「黒南風」、長谷川四郎の「ガラ・ブルセンツォワ」・「鶴」、五味康祐の「喪神」、沢野久雄の「北里夫人の椅子」・「夜の河」、小島信夫の「小銃」、安岡章太郎の「愛玩」、吉行淳之介の「ある脱出」、武田繁太郎の「生野銀山」、塙英夫の「背教徒」、松本清張の「或る小倉日記」伝の十二点。

会議は、約二時間に亘って続き、結局、受賞作は五味康祐の「喪神」

と松本清張の「或る小倉日記」伝」と決まった。この二人の受賞者は、今日言うまでもなく大衆小説家として名を成している。したがって、純文学の小説家に与えられる芥川賞の授賞は、やや的外れだったことになる。この原因は、選考した委員達のめがね違いか、それとも作品自身の分かりにくさか。

『文芸春秋』昭和二十八年三月号には、例の通り受賞作品と選後評とが掲載されている。その選後評を子細に読むと、この二作を強く推薦したのは、佐藤春夫・川端康成・坂口安吾、反対だったのは、丹羽文雄と石川達三。残る三人は、司会者から強いてどちらかと賛否を迫られ、やむ無く、受賞作の賛成にまわるといふ経過を経て決着したらしい。傑作なのは宇野浩二で、「私が思案にあまってみると、だれかが、「仕方がないから、目をつぶって——」と言った。それで、私は、大きな声で「目をつぶって」と言って、『喪神』にもサインしたのである(宇野浩二評)という。これが、議論の終決の模様である。この時、「或る小倉日記」伝」を積極的に推奨したはずの佐藤春夫でさえ、実は苦笑しながら「今日はみな盲目(めくら)になったかな」と発言していたと言う。

格別優れてはいなかった。誰もが多少の違和感を持っていた。だが、その違和感を鋭くえぐり出す者がいなかった。清張は、多分に時の成り行きで受賞した。選後評を要約すれば、おおよそこのようになる。

それでは、辛口で定評のある芥川賞の選考委員が、なぜ揃いも揃って目をつぶったのか。

清張の文章力を評価する選後評は意外に多い。反対の立場にいた丹羽文雄でさえ、「或る小倉日記」伝」は、文章もしっかりしてゐて、この人はもう出来上がってゐる。」と評価する。保留派の瀧井孝作は、「或る小倉日記」伝」は、青空に雪の降るけしき、と形容したいよ

うな、美しい文章に感心しました」と言う。推薦派の坂口安吾も「文章甚だ老練」「造形力たくましく底に奔放達意の自在さを秘めた文章」と評価する。また、同じく推薦派の佐藤春夫も、「特異な取材をあざやかな組み立て方でじっくり処理して、落ち着いたそのつのない文章もよい」と言う。

だが、勿論、委員の大半は、この作品にかなり不満があったらしい。

丹羽文雄は、「この小説は鷗外におんぶしてゐる」と言い、舟橋聖一も「私一個としては、何んらの感銘もない」と言う。また、石川達三は「小倉日記」に光ったものを感じ得ない」と言い、瀧井孝作に至っては「内容は、無名の文学青年の伝記で、大したものではないのによくまとめである」と言う始末で、まるで文体だけで受賞した作家のような扱ひである。その中で、一人佐藤春夫だけは「母子の愛情もあまり纏説しないところがよい。こ奴なかなか心得てゐるわいという感じがした」と好意的に批評している。どうやらここが、評価の分岐点であるらしい。清張は、果たして「心得て」「母子の愛情」の中身をくどくは、述べなかつたのか。それとも、くどく述べるまでもない「愛情」が描かれているのか。これを判別するには、第一に、母と子との愛情の質を確かめること。第二に、「かるみ」を愛する佐藤春夫ならずとも「こ奴なかなか心得てゐるわい」と言えるように、母と子の愛情が「さりげなく」かつ「しつかり」と表現されているかどうかを確認すること。それが、この作品の評価を決めるのである。とすれば、その答を煮詰める手だては、当然、表現に即して母子の愛情を分析する他はあるまい。

### 三 章立てと概観

「或る『小倉日記』伝」の第一章は、昭和十五年の秋のある日、東

京の詩人K・Mが「小倉市博労町二八 田上耕作」という未知の男から一通の封書を受け取ったところから始まる。用件は、自分が調べている小倉時代の鷗外の事跡調査に研究上の価値があるかどうかの問い合わせだった。K・Mは、田上耕作の調査に興味を覚え、激励の返事をしたためる。続く第二章は、田上耕作の生い立ちの説明。第三章は、田上耕作が鷗外の小説に惹かれるようになるまでの経過。第四章は、田上耕作が小倉の医師白川慶一郎に親しみ、その家に入り込んで、郷土史研究に近付いて行く次第。

第五章は、田上耕作が岩波書店から出版された『鷗外全集』第二十四巻の「後記」に触れて、小倉時代の鷗外の事跡を調査しようと思ひ立つ際の興奮。第六章は、調査の際の不具者故の苦しみと喜び。第七章は、田上耕作が調査のメモをまとめて東京のK・Mに送り、返事を得て歓喜する一方で、取材の困難さも加わって行く様子を語る。第八章は、白川病院の看護婦山田てる子の登場。彼女は、取材に行き詰まつた田上耕作を東禅寺に導き、当時鷗外たちが寄進した魚板を発見する。第九章は、相変わらず続く取材の困難さと、山田てる子の気持ちがあつかめないまま、耕作の嫁になって欲しいと思ひ始める「ふじ」の親心。第十章は、明治三十二・三年頃、福岡日日新聞社小倉支局長を勤めた麻生作男（あそうさくお）の取材を契機に、耕作の調査が急に進展する一方、山田てる子との縁談が壊れてゆく次第を語る。

第十一章は、敗戦後の田上耕作の生活の窮乏と病状の悪化、調査の中断と耕作の死を描く終章。結末は、耕作はずっと寝たきりとなったインフレが激しくなり、家賃以外にほとんどたよる生活費はなかつたが、その家賃が僅かな値上げでは追いつかなかつた。「家賃が一軒ずつ失われていった」。「どう耕ちゃん、うまいかえ。これは長浜の生き魚だよ。」近くの漁村からとれる釣り魚である。耕作はうなずきながら腹這

いになって、手掴みで飯と魚を食べた。もはや、箸を握ることもできなくなつたのである。「ふじが熊本の遠い親戚の家に引き取られたのは、耕作の寂しい初七日が過ぎてで、遺骨と風呂敷包みの草稿とが、彼女の大切な荷物だつた」と結ばれる。

物語を展開する際の清張の緩急の巧みは、佐藤春夫の言う通りである。調査の頓挫の後に来る思いがけない進展、その進展の後に来る一層深刻な頓挫。落胆の後に急に開ける展望、希望の後の一層の落胆。周囲の冷笑の後に来る穏やかな善意、善意では決して救えない深刻な不幸。愛情の子感と予感の後のやるせない孤独。調査の進展に連れて一喜一憂する母子、一喜一憂しながら確実に深刻になる母子の生活苦。これらが巧みにないませられ、読者は確実に最後まで母子の運命を危ぶみながら読み進んでしまう。真に、巧みなのである。

けれども、この文章、時に巧み過ぎて大切な部分をすっかり読み飛ばしてしまふ危険もある。表現の細部をもう少し掘り下げてみよう。

#### 四 親子

家族には、少なくとも二つの顔がある。一つは、親から子につながつてゆく「血脈」の顔。これは、誰が父親であるかを明示することによって、唯一の明確な親子関係である母と子の関係に、もうひとつの親子関係を加え、「合法的な結合を他から区別して、そこから生まれる子供に相続人の資格を保證する」(ジョルジュ・デュビー『中世の結婚』四〇頁)ための顔。

もう一つは、夫婦の結び付きに現れる「つがい」の顔。これは、「性的活動を要請する以上―あるいはむしろ性衝動の生殖に関わる部分を要請するものである以上―、神秘の謎に包まれた領域に、生命力や衝

動に、すなわち聖なるものに属する」(『中世の結婚』四一頁)。普段は、この二つがベクトルとして働き、互いに均衡を保つて家庭を支えている。けれども、時として、この均衡が破れる時がある。たとえば、小説『或る「小倉日記」伝』のように、「つがい」の一方が消滅した場合。

もともと、母体と胎児とを一つの有機体として考える迷信は根強い。たとえば、妊娠の際の子育て地蔵信仰、死産の際の水子地蔵信仰。現在でさえ、妊婦は時にこう言われる。醜いものは見ないように、綺麗な音楽を聞くように、そうすれば、健やかな子供が生まれるでしょう。では、もし、不具の子供が生まれたら、その原因は、妊婦が不用意にも、地蔵尊をおろそかにし、醜い絵や音楽を聞いたせいだろうか。原因と結果とを結ぶ糸は、明らかに切れている。人の出生は神秘に属する。だから、却つて、ことは、日ごろの両親の不摂生や人柄の悪質や目に見えぬ悪霊の仕業と結び付けて説明される。殊に、不具の子供を抱えた上に「つがい」の一方を失つた無力な妻には、この説明が好んで用いられる。もし、「ふじ」の場合のように妻がついに再婚しないとすれば、彼女が抱つて立つ足場は、生涯崩れたままになるだろう。

しかし、再婚を諦めた「ふじ」の場合、希望の足場はむしろ他にあった。息子の耕作は、誰がみても白痴のように見えたが、実は、学校での成績はズバ抜けていたのである。

ふじのようこびは非常であつた。これが正常な身体であつたらと、不覚に涙を出すこともあつたが、ともかく頭脳が人並以上と思えたことは、うれしかぎりであつた。母一人、子一人である。こんな身体でも、ふじから見れば杖とも柱とも頼りに思えるのであつた。(新潮文庫『或る「小倉日記」伝』一四頁、以下『日記伝』と略す)

かつて、夫は、耕作の体を苦しめながら死んだ。この時、耕作は十歳で、すでに学齢期に達していた。耕作の成績はズバ抜けていた。だが、夫は、「言葉のはっきりしない、口も始終あけ放したままでよだれをためているびつこのわが子の姿は親としてたまらなかつた」(『日記伝』一三頁)と言う。

この場合、「親としてたまらなかつた」という言葉の含みは、推察しておく必要がある。彼には、我が子を見る事が、苦痛であつたこと。それにも拘わらず、「親」としてはその苦痛に堪え続けなければならなかつたこと。その事がまた、彼の苦痛を一層増幅してしまふこと。その結果、彼はやがて、重い「やり切れなさ」や絶え間無い心の「痛み」と同居するようになること。

P・J・ウィルソンによれば、「多くの文化で、男性は、子供をもつてはじめて一人前の人間になる」(P・J・ウィルソン『人間—約束するサル』、佐藤俊訳、岩波現代選書、一〇五頁)という。とすれば、満足な子供を持たない「男」は、その社会でどのように処遇されるのだろうか。

定一は、不具の子を持つことで、恐らく自分の文化的な成熟を妨げられることになるだろう。不具の子を持つ傷みは、直接彼の心を刺し貫くだろう。そして、それにも拘わらず、苦痛に閉ざされた今の彼には有効な対応策が無い。これが、彼が知らぬまに選んでいたせつない「父」の姿である。

念のために言えば、我が子と思う事は、「父」の生理ではない。人類学者によれば、愛そのものが存在しない社会がある。そこでは、「三歳を過ぎた子どもたちは、食物を隠さねばならないライバルとみなされている」(E・シュルロ、O・チボー編『女性とは何か(下)』、人文書院刊)。要するに、敵対する「父子」から抱擁する「父子」まで、さまざま

まな「父・子」がある。その「父・子」の中から、人は、知らぬ間に一つの「父」を選びとる。多分、自分の身の丈と時々の子供の状況に導かれて。したがって、もし、成行き上「親」となり、身の丈以上の「父」でなければならぬ時があれば、人は、彼の事を「不仕合せ」な男と言う。

だが、同じ状況がいつも「不仕合せ」な「母」を産み出すとは限らない。江藤淳の『成熟と喪失—母の崩壊—』以来、日本文学の世界でも、母と子との際立った一体観を日本の家族文化に由来するものと見る見方が定着している。

「ふじ」の場合、我が子に正常な身体を希望することは、諦めなければならなかつた。あまたの医者を探ねた後に、この決心が生まれた。ところが、子供の才能に光が見えはじめた時、子供は自然に「身体」と「才能」の二つの側面から見え始めた。勿論、二つとも備えるに越したことはない。「これが正常な身体であつたら」と悔やまれはした。涙は、「不覚にも」、諦めの堰を越えてやってきた。呼び水は、我が子に「才能」を見付けた激しい喜びだった。子供の現状は同じだったにも拘わらず、母は「才能」を見て喜び、父は「身体」を見て嘆いた。

思えば、「喜び」とは不思議な感情である。多分、母はこの「喜び」を通して母になる。ふじは、我が子の「才能」を「杖とも柱とも頼り」に思った。この「喜び」のせいで。

だが、その才能は、母の生活を安定させる種類の才能ではなかつた。この才能に頼るとき、生活は一層危うい軌跡を描くだろう。

ふじは耕作の将来を考えて、洋服の仕立屋に弟子入りさせた。だが、耕作は、三日と辛抱出来なかつた。左手が不自由な上に、職人気質に馴染めなかつた。ふじは、自分の裁縫の賃仕事と、家作の家賃だけで生計を立てることにした。これもまた、息子の才能を頼む一層せつな

い「親心」である。

一方、耕作にも、やがて自分の「才能」に出会う時が来る。学校の成績のよかったことは、耕作自身にも、多少、世間に対して、自信らしいものをつけさせ、不具者もつ、ひげめない暗い気持から救った。が、やはり孤独はまぬがれない。彼は文学書を好んで読むようになった。（『日記伝』一五頁）

その頃、小倉に白川慶一郎という医者がいた。大きな病院を持っていて、蔵書も多かった。友人の江南は、この白川の家に耕作を連れて行った。白川は、早速、耕作に蔵書の整理を頼んだ。耕作は、白川の家に通い始めた。白川は、かねてから論文を書く準備を進めていた。しかし、忙しすぎて、母校のQ大まで参考文献を見にゆく暇がない。そこで、耕作に要領を話して、文献筆写の仕事を頼んだ。お蔭で、耕作は更に一年以上Q大へ通った。その内に、丹念に物を調べる習性が身に付いた。

白川は、毎月の新刊書を耕作達が言うままに買い込んだ。耕作は、それに整理番号を付けて、片端から読んだ。ちょうどその頃（昭和十三年）、岩波版『鷗外全集』が出版された。耕作は、鷗外に傾倒していた。『鷗外全集』第二十四巻の後記には、鷗外の小倉時代の日記が散逸した次第を載せている。耕作は、未見のこの日記に自分と同じ血が通うような憧憬さを感じたという。彼はやがて、民俗学の「資料採集」の手法を用いて、「小倉日記」の空白を埋める仕事を思い着く。この時、彼は初めて「鉾脈をさぐりあてた山師のように奮い」起ち、「一生これと取りくむのだと決めた」（『日記伝』二二頁）。

この希望が、彼の実生活を潤す見込みのない希望であることは、言うまでもあるまい。外目には見えなかったが、耕作は内心深く自分の身体に絶望し、煩悶していた。「ただ、煩悶して崩れなかったのは、多

少とも頭脳への自負からであった。（中略）どのように自分が見られようとも、今にみろ、という気持もそこから出た。それが、たった一つの救いであった」（『日記伝』一八頁）。長い煩悶の末に、彼は、ようやく「今にみろ」と自負するにたる希望に出会ったのである。希望の方にしても、何と住み心地のよい主人を見つけた事だろう。

## 五 母と子

「才能」に賭ける点では、母の選択も子の選択によく似ている。母は喜んで、耕作の後援を申し出る。

あんな不具の子にというのは関りのない世間の話だ。実際、ふじは耕作にわが夫のように仕え、幼児のように世話をした。もつれた舌でわが子が鷗外のことを話すのを、いかにもうれしそうな顔をしてこの母は聞いていたのである。（『日記伝』二二頁）

目の前に、新しい可能性が開けたときにも、人は実際には限られた生き方を選択しなければならぬ。というのも、我々が、一般に自分の社会的な地位や役割にふさわしい形でペルソナ（仮面）形成し、それによって、辛うじて安定した地位を獲得することができるからである（河合隼雄『母性社会日本の病理』中央公論社刊、七二頁）。しかし、もし息子の「才能」に賭ける以外に自分達の未来に望ましいものが見当たらないとしたら、この母は何をするだろうか。

耕作はできるだけ、ゆっくり事情を説明した。が、不明瞭な発音で、オウガイ、オウガイとくり返しても、老農には何のことかわからなかった。彼は啞か阿呆を見るように、姉は居らんからわらん、と手真似をまじえて言った。（中略）

その翌日、ふじは朝早くから人力車を二台雇った。途中のバス

の停留所からは乗物の便がないのでここから乗って行くより仕方がなかった。往復八里だ。この車賃だけでふじの切りつめた生活費の半月分にも当たった。せっかくの耕作の希望の灯をここで消させたくない一心である。(『日記伝』二六頁)

この行動を、ふじの「母性愛」と片付けるのは、月並に過ぎるだろう。ふじは、子供を危険な領域から隔離するよりもむしろ、子供と共に行動するからである。「夫のように仕え、幼児のように世話をした」(『日記伝』二二頁)という言葉通りだとすれば、耕作はむしろ、ふじの分身だと言った方が良い。

事実関係に照らして言えば、実在の田上耕作は、明治三十三年四月二十四日、福岡県門司市生まれ。父の名は田上真素雄(ますお)、母の名は友(とも)。耕作には二人の姉がおり、長女を縫(ぬい)、次女を千代(ちよ)と言う。父定一は文久元年生まれ、母「友」は、慶応元年四月三十日生まれ。

父真素雄の死は、大正三年七月十二日。この時、父は五十四歳(数え年)、母は四十九歳、田上耕作十四歳。耕作はこの翌年大正四年四月、私立豊国中学校に入学している。保証人は、義兄の長谷川千蔵(長女「縫」の夫、官吏)と福村亀二(次女「千代」の夫、医師)だった(岩城之徳「初期小説のモデル―」或る「小倉日記」伝」と田上耕作―) (『国文学 解釈と鑑賞』昭和五十八年九月号)。

ところが、小説『或る「小倉日記」伝』では、この二人の義兄も二人の姉も登場しない。田上の家は、父の死後、母一人子一人で、辛うじて家作の家賃で生計を立てる母子家庭である。当然、親族の援助もなく、周囲からは年々孤立して行く。しかも、夫に死別した際の「ふじ」の年齢は、三十歳で、実際よりも十九歳も若い。当然、彼女の若さと美しさが、実際以上に強調される。その上、父を失った時の耕作の

年齢も母の年齢に連れて引き下げられた。小説では、十歳、実際は、十四歳。これによって、幼い障害児を抱えた若い未亡人の不運な巡り合わせも、哀愁に包まれた彼女の美しさも強調される。また、当然、周囲からの誘惑の多さも、さらにその誘惑を逃れて、生涯耕作だけを頼りに生きようとする「ふじ」の情愛の深さも際立つことになる。要するに、清張は、この「ふじ」の容姿と心性とを著しく美化することで、本来悲惨な物語を「青空に雪の降る」ような清烈な物語に書き替えたのである。

情愛の深さ、言葉で言ってみれば単純だが、当人の「ふじ」までが単純に暮らしていた訳ではない。さらに言葉を重ねるよりは、実例を積み重ねてみよう。

(1) 実際、ふじは耕作にわが夫のように仕え、幼児のように世話をした。(『日記伝』二二頁)

(2) その翌日、ふじは朝早くから人力車を二台雇った。(中略)この車賃だけでふじの切りつめた生活費の半月分にも当たった。せっかくの耕作の希望の火をここで消させたくない一心である。

(3) 『日記伝』二七頁)「よかった。耕ちゃん、よかったねえ」とふじは顔を見合つたまま涙ぐんだ。これで、耕作の人生に希望がさしたかと思うと、ふじはうれしさをどう表わしようもなかった。自分の心も暗い地の底からやつと出口の光明を見た思いだった。(『日記伝』二九頁)

(4) 嫁さえ着てくれたらと、ふじの心労はたいではなかった。(中略)若いころ降るような縁談に困つたふじは、息子の嫁を迎えることができず、言いようのない辛さを味わっていた。(『日記伝』三三頁)

- (5) ふじはてる子がくると、まるでお姫さまを迎えるように歓待した。(中略) ふじはてる子に心の隈で万一を空頼みしながらも、半分は諦めていた。が、その諦めのなかにも、やはり、何か奇跡のようなものを期待していた。(『日記伝』三四頁)
- (6) 「それなら一緒に行っておたずねしようよ」と、ふじが話を聞いて言ったのは、耕作が望むならどこまでも、ついていってやりたかったのだ。(『日記伝』三八頁)
- (7) 自分から起ちあがり、「さあ、元氣を出そうね、耕ちゃん」と歩きた。ふじのほうが一生懸命であった。(『日記伝』四〇頁)
- (8) ふじは耕作のために小倉に帰ったら、思いきって必死に話をする子に切り出そうと決心した。(『日記伝』四一頁)
- (9) ふじが、熊本の遠い親戚に引き取られたのは、耕作の寂しい初七日が過ぎてで、遺骨と風呂敷包みの草稿とが、彼女の大切な荷物だった。(『日記伝』四八頁)
- 「ふじ」がむしろ執着に近いまでに、耕作の研究を案じていたことは明らかだろう。「希望の火を消さたくない一心である。」「耕作の人生に希望がさしたかと思うと、ふじはうれしさをどう表しようもなかった。自分の心も暗い地の底からやつと出口の光明を見た思いだった。」「耕作が望むならどこまでも、ついていってやりたかったのだ。」「ふじのほうが一生懸命であった。」など、むしろ「ふじ」自身が耕作を通じて自己の実現を計っていると見える例さえもある。
- 「男」が「子」を持って初めて「父」になるように、「女」もまた、「子」を育てて初めて「母」になるのであろう。だから、もし、その子が不具であれば、それだけで「父」も「母」も大きく威信を傷付けられる。それによって、社会的な成熟を妨げられることもある。それが、私達の文化である。もし、「父母」と「子」との分離が出来ないなら、人は、

否応なく強い「父」、強い「母」であることを求められるだろう。生まれながらに強ければ、問題はない。だが、大方は、自分がその種の障害に強いのか弱いのかさえ知らない。それがあつた時、不意に強い「父母」であることを求められるのである。多分、私達は初め困惑し、次いで強いて強くなろうとして、自然に個性をあらわにする。この「或る」「小倉日記」伝では、露わになったものは、不具の子を持ちながら、「父」の威信を内面に確立できずに苦しんだ「夫」と、不具の子を抱え「夫」まで失った故に遙かに深く「母」であり得た「妻」の姿である。

## 六 むすび

定一は、不具の耕作を苦に病んで死んだ。「ふじ」は、「母」でありつづけた。少なくとも耕作の存在は、江藤淳の言う「母の崩壊」から見れば、遙かに高い地点まで「ふじ」の母性を運んだと言つてよい。勿論、これには、彼女の情愛の深さも与かつて力がある。が、それと並んで確かなのは、母性が文化の見えない軌道に添つて成熟するという事実である。

「ふじ」の愛情の描き方に不足はない。そして、彼女の愛情のあり方に、格別の新しさがあるわけでもない。当たり前の愛情が清烈に描かれているのである。「古い」と言えば、言える。現代の母性と掛け離れていると言え、言える。評価は、当然分かれるだろう。そして、読者の大部分は、多分この作品を支持するだろう。彼等が求めているのは、『孤女房』『蛇女房』『鶴女房』『蛙女房』などメルヘンの世界でお馴染みの、無限包容の母性だからである。